

灰釉系陶器窯の床下施設について

—細口下1号窯の事例を中心に—

池本正明

1

細口下1号窯は、名古屋市天白区天白町に所在する灰釉系陶器⁽¹⁾を焼成した窯業遺跡である。この遺跡は国道302号線の側道建設中に発見された。その時に採集された遺物中には、藤花をモチーフとした文様を持つ四耳壺や瓦類も含まれていたため、実体が不明確ながらも特殊器種を焼成する窯として注目されてきた。

こうした中で、窯体の調査が国道302号線の本道建設に先立つものとして実施された(池本 1997)。検出された窯体は分焰柱を有する窖窯で、焼成室がほぼ残存する。残存長は12.0m。床面は二枚検出されているが、断面観察ではさらに一枚の痕跡を確認できる。ここでは下層を一次窯、上層を三次窯とし、中央の面を二次窯とする。一次窯は、最大幅が分焰柱基底部上端から2.3m地点で1.8mをはかる。平面形はややゆがむ長方形で、傾斜角は29度。床面は赤褐色の被熱部分を残存させるに留まる。三次窯は、最大幅が分焰柱基底部上端から1.8m地点で2.0mをはかる。傾斜角は27度。平面形は一次窯とほぼ類似するが、分焰柱基底部上端から計測して、0.2m地点から2.2m地点までの右壁が、最大20cm程度張り出す。

ところでこの窯体を特徴付けるのは、一次窯の床面上で確認できた施設である。ここには大きく二つの構造が認められる。まず一つは、焼成不良の椀を伏せ置いたり、焼台を敷き詰めた施設となる。これらは、三次窯の設定段階に、二次窯から一次窯の被熱部分の大半までを掘り下げた後に据え置かれたものである(後述)。分布域は、分焰柱基底部上端から計測して2.0m地点から3.0m地点までに集中するが、分焰柱より上方1.1～0.6m地点の左壁側にも、これと同様のものが若干確認

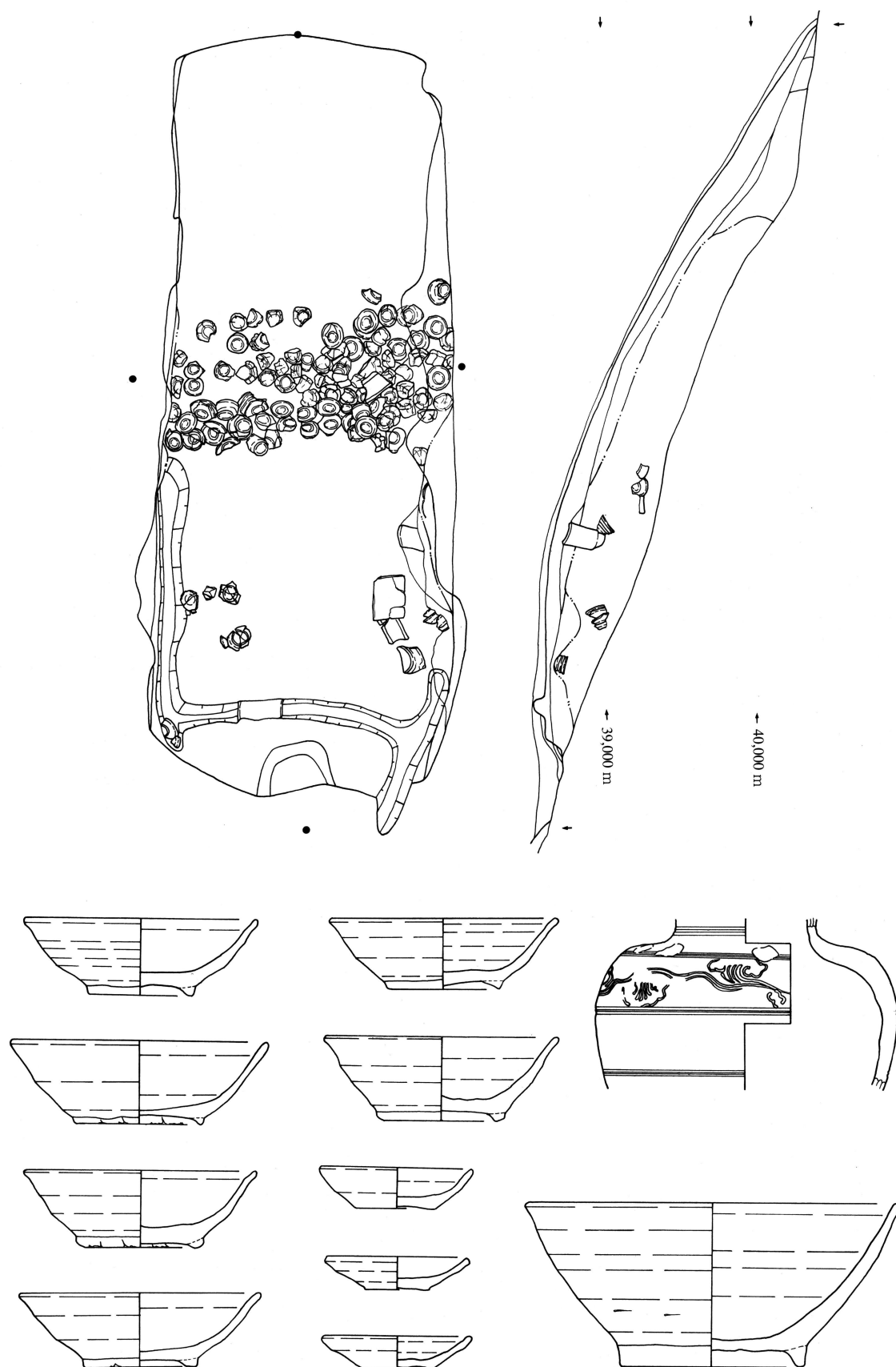
できる。なお、三次窯はこの上に黄褐色粘質土や褐色細砂などを充填した後、木炭を敷き詰めた床面に貼り付けられたが、調査段階では貼床の大半が流失していた。

もう一つは、焼成室下方で確認できた溝である。幅は約12cm。右壁と左壁に沿って設定され、中央部が焼成室を横断する形で連結する形状を呈する。左壁の溝は分焰柱基底部上端から計測して2.0m地点まで、右壁は同様に0.5m地点まで掘削されている。燃焼室側は右壁では残存部にまで続くが、左壁はほぼ分焰柱上端部で終息する。埋土にはぶい赤褐色の粘質土となる。一部に丸瓦を転用した蓋が設置されているため、三次窯(二次窯も含むかもしれない。)の暗渠として機能していた可能性が強い。

以上のように、細口下1号窯では床面下の施設として焼成不良の椀などを敷き詰める施設と溝が確認できた。本稿は、こうした灰釉系陶器窯の床面下に付設される施設を、灰釉系陶器生産の中で評価することを主題としたい。

2

ところで、細口下1号窯のような床面下の施設はしばしば報告例が知られている。したがって、これを灰釉系陶器窯に通有の改修法として考えることができる。ここではこれを床下施設と呼称する。これらの具体的内容は、細口下1号窯で確認できた二者に代表できる。すなわち、一つは焼成室床面を掘り下げた後、異なった土砂を充填することで土質改良を加えるもの、もう一つは溝を設定するものである。ここでは前者を作業A類、後者を作業B類と仮称する。作業A類には、細口下1号窯のように焼成不良品などを敷き詰めるもの



第1図 細口下1号窯遺構図・出土遺物（遺構図は1：40、遺物図は1：4）

の他に、掘削後にそのまま土砂を充填し、炭化物もしくは木材などを貼床直下に敷き詰める事例もある。ここでは、前者を作業A 1類、後者を作業A 2類と細分する。また、作業B類も溝の基底部に焼成不良品などを敷き詰める事例と、そのまま土砂を充填する事例があり、同様に作業B 1類、作業B 2類と細分する。なお、溝の形状は様ではないが、機能上の差異が考えられないという理由から特に区分はしない。現状ではこれを共通する内容として認識しておく。

3

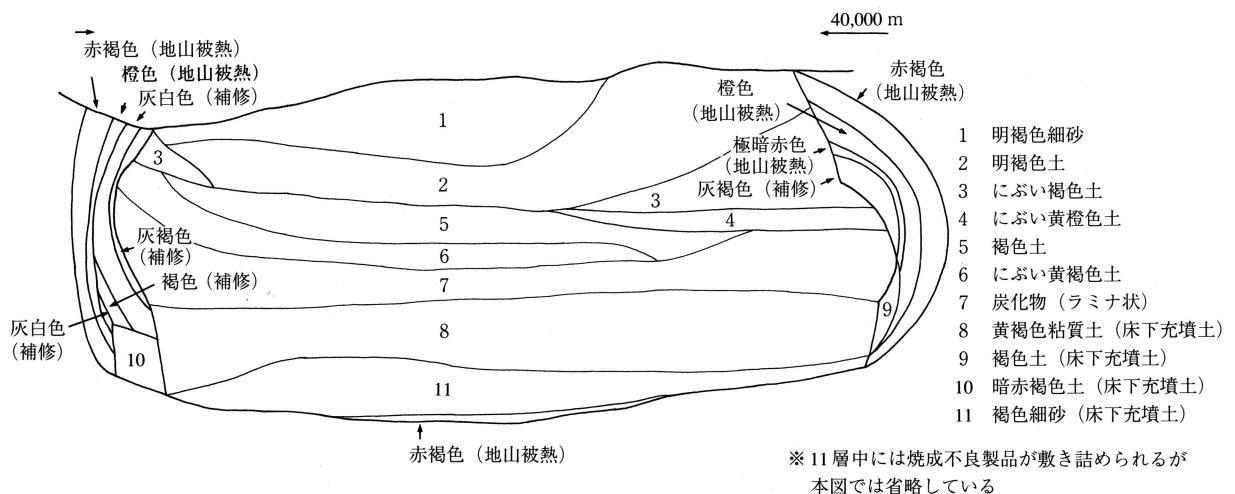
ところで、床下施設は防湿効果に関連した作業と説明されることが多い。これを最も明快に説明したのは奥川弘成氏であろう（奥川 1987）。ここで奥川氏は、床下施設を窯体の基盤層の地質と関連させて考えている。これによれば、掘り抜いた窯体の床面が粘土層などの透水性が低い土壌となった場合に、防湿効果を保たせる目的で床下施設が追加されたとした。

次に、この指摘を念頭に床下施設の設置段階について考えたい。先に引用した（奥川 1987）は、床下施設の設置段階については論究していない。しかし、一般的に考えると、これらは窯体の使用

開始後とした方が理解しやすいであろう。

第2図に示すのは細口下1号窯の断面図を拡大したものである。ここで注目したいのは、壁面や床面の地山被熱部分の変化である。仮に掘り抜いたままの窯体を何も手を加えずに使用したのであれば、その被熱部分は内側の熱源に最も近い部分が灰白色、その周囲がオレンジ色、さらにその外側が赤褐色と、同心円状に変色する。これは言うまでもなく地山土が窯内の熱により科学変化したものである。焰の状況により幅の差は生じるが、熱源からの順序が変わったり、ある程度の厚みを持つ被熱部が途中で突然消滅したりすることはない。しかし、第2図で被熱部分のあり方を観察すると、壁面では最も外側に赤褐色の被熱部分が確認できるが、床面ではこれが部分的にしか確認できない。また、左壁では灰白色の被熱部分が二層確認できるなど、被熱状況の矛盾を観察することができる。

ところでこうした被熱状況の矛盾は、窯体の改修ないし補修の存在を考えると簡単に解決する。つまりこれを窯体の加工前と後の被熱が同時に観察できた結果と理解するのである。このことを逆にいえば、被熱状況の矛盾が観察できる窯体は補修ないし改修が加えられていることになる。な



第2図 細口下1号窯体断面図（1：20）

お、細口下1号窯では第2図に示すように加工痕が床下施設の設置面と一致している。従って、細口下1号窯は操業期間中に床下施設を設置していることが指摘できる。なお、同様の視点で各報告書に掲載された窯体図を観察すると、床下施設は操業期間中に設置されたものが多い⁽²⁾。灰釉系陶器窯は地下式の窖窯であるため、防湿問題は常に関わる課題であったのであろう。地下水は、「水物」の言葉で表現できるように、常に変動する。床下施設の設置は、こうした問題をクリアして窯体を良好な状態で維持させる技術であったのであろう。その具体的内容は、全体に染み出すような湧水と、局所的な湧水に対応するものとなっていたと考えられる。前者は、作業A2類を基本形とし、そのレベルを越えた段階で作業A1類にクラスチェンジする工法で、後者は作業B2類をそれとし、同様の理由から作業B1類にクラスチェンジする工法となる。つまり、それぞれの状況に応じた可変的なものであったと考えられる。なお、施工範囲についても同様であろう。

4

次に床下施設の分布状況を考える。床下施設は、猿投窯、知多窯、美濃窯、渥美窯で確認できる(第1表)。管見に触れたのは93例である⁽³⁾。分布上の特徴は、知多窯にその例が多い。現状で最古のものは東山窯で、12世紀前葉あたりにまでのぼる可能性を持つ。そして、12世紀末～13世紀初頭頃までには各生産地で事例が増加している。つまり、各生産地であまり時期を違えずにほぼ同時に導入されたこととなる。

ここでは、これが焼成室の床下という技術導入が困難な部位の工法であることに注意しなければならないであろう。つまり、灰釉系陶器の各生産地が競合していたのであれば、その生産能力と強く関わる新技術は、当然隠匿されなければならない

い事項となるはずである。しかし、ここにはこうした点は全くうかがうことはできず、むしろこれが意図的に伝達された可能性すら考えることができる。

ここで注目したいのが、この時代にみられる各生産地の共通性である。最も注意したいのは、各生産地ではほぼ同時に主力器種の一つである小椀が消滅し、これに代わって小皿⁽⁴⁾が登場することである。このことは13世紀以後に発生する椀の高台が消滅する時期が各生産地でまちまちであることと対比的となっている。

以上のように、窯体の床下施設や生産器種の共通性から灰釉系陶器生産を考えると、この段階には、灰釉系陶器生産の全体もしくはかなり広いエリアを掌握する存在を考えなければならない。そして、床下施設による窯体の改修技術は、この存在を背景として各生産地に正確な形で導入されていくと考えたい。小椀から小皿への変化も同様であろう。

ここで注目したいのは、各生産地とも器種の単純化が大多数の窯で指摘できる一方、全体の数パーセント程度の窯が特殊品をこれに加えて焼成している事実である。こうした二面性が、12世紀～13世紀初頭の灰釉系陶器最大の特徴と言えるであろう。特に後者についてはこれが灰釉系陶器生産を掌握する存在と直結したものであったことはほぼ間違いないことであろう。なお、尾張での瓦生産(柴垣 1987)、三河での国司名が刻まれた壺の生産(中村 1996)などの受注はこれを最もよく表現しているであろう。

5

前項では、各生産地における12世紀～13世紀初頭の様子を考えた。その結果、それぞれが共通性の強い内容を持つことを指摘することができた。

しかし、13世紀前半以後の様子はこれとは異な

名称	改修法	年代	古窯群	文献	刊行年度	刊行機関	備考
NK1-1-C号窯	A 1	13世紀中葉	猿投窯	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書	1976	名古屋市教育局委員会	NN315号窯 柄を雑然と入れる
NN314号窯	A 1	13世紀前葉	猿投窯	NN314号古窯発掘調査報告書	1981	名古屋市教育局委員会	
NN328号窯	A 1 + B 1	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	NN328号古窯発掘調査概要報告書	1981	名古屋市教育局委員会	
NA323B号窯	A 1	13世紀前葉	猿投窯	昭和56年度埋蔵文化財調査概要報告書	1982	名古屋市教育局委員会	
NA335B号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	年報平成8年度	1997	愛知県埋蔵文化財センター	
NA335C号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	年報平成8年度	1997	愛知県埋蔵文化財センター	
NA335D号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	年報平成8年度	1997	愛知県埋蔵文化財センター	
NA335E号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	年報平成8年度	1997	愛知県埋蔵文化財センター	
NA335G号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	年報平成8年度	1997	愛知県埋蔵文化財センター	
細口下1号窯	A 1 + B 2	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	年報平成8年度	1997	愛知県埋蔵文化財センター	二段
NA324C号窯	A 1	13世紀前葉	猿投窯	みはらしNo.190	1997	見晴考古資料館	
NA320A号窯	A 2	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	NA320号古窯発掘調査報告書	1992	名古屋市教育局委員会	残存状況不良A 1 類の可能性あり
NA320B号窯	A 2	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	NA320号古窯発掘調査報告書	1992	名古屋市教育局委員会	残存状況不良A 1 類の可能性あり
NN302号窯	A 2	12世紀後葉～13世紀初頭	猿投窯	NN302号窯NN304号窯発掘調査報告書	1992	名古屋市教育局委員会	
K-G-88号窯	A 2	13世紀前葉	猿投窯	県営北部細作地帯総合土地改良事業地内埋蔵文化財報告書	1996	三好町教育委員会	
K-G-90号窯	B 1	12世紀後葉～13世紀初頭	東山窯	県営北部細作地帯総合土地改良事業地内埋蔵文化財報告書	1996	三好町教育委員会	
H-G-85号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	東山窯	八事裏山1号窯第二次発掘調査報告書	1993	名古屋考古学会	瓦を敷く
H-101号窯	A 2	12世紀後葉～13世紀初頭	東山窯	H-101号窯発掘調査報告書	1973	名古屋市教育局委員会	H-G-101号窯
H-G-6B号窯	A 2	12世紀前葉～12世紀中葉	東山窯	揚羽町古窯発掘調査報告書	1991	名古屋市教育局委員会	
南山15号窯	A 2	13世紀前葉	瀬戸窯	南山15・34号窯発掘調査報告書	1984	瀬戸市教育局委員会	
南山34号窯	A 2	13世紀中葉	瀬戸窯	南山15・34号窯発掘調査報告書	1984	瀬戸市教育局委員会	
穴田南2号窯	A 2 + B 2	12世紀後葉～13世紀初頭	瀬戸窯	瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ	1984	瀬戸市教育局委員会	溝は燃焼室のみ
穴田南4号窯	A 2	13世紀中葉	瀬戸窯	穴田南古窯跡群Ⅵ	1992	瀬戸市教育局委員会	
穴田南6号窯	A 1	13世紀中葉	瀬戸窯	穴田南6号窯	1991	瀬戸市教育局委員会	
小田妻SY01号窯	A 2	13世紀中葉	瀬戸窯	小田妻古窯跡群	1992	愛知県埋蔵文化財センター	
小田妻SY02号窯	A 2	1 3 世紀後葉～1 4 世紀前葉	瀬戸窯	小田妻古窯跡群	1992	愛知県埋蔵文化財センター	
小田妻SY03号窯	A 2	13世紀中葉	瀬戸窯	小田妻古窯跡群	1992	愛知県埋蔵文化財センター	
小田妻SY04号窯	A 2	13世紀中葉	瀬戸窯	小田妻古窯跡群	1992	愛知県埋蔵文化財センター	
小田妻SY06号窯	A 2	13世紀中葉	瀬戸窯	小田妻古窯跡群	1992	愛知県埋蔵文化財センター	
瀧池東古窯	A 2	13世紀中葉	瀬戸窯	瀧池東窯	1990	尾張旭市教育局委員会	
小田妻SY05号窯	A 2	13世紀中葉	瀬戸窯	小田妻古窯跡群	1992	愛知県埋蔵文化財センター	
大高山5号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	半田市史	1977	半田市役所	
深谷6号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初葉	知多窯	深谷古窯跡群古窯址発掘調査報告書	1985	半田市教育局委員会	
深谷9号窯	A 1	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	深谷古窯跡群	1989	半田市教育局委員会	
深谷11号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	深谷古窯跡群	1989	半田市教育局委員会	
十三塚5号窯	A 1	12世紀中葉	知多窯	半田市史上巻	1990	半田市役所	
三ツ池5号窯	A 1	不明	知多窯	三ツ池古窯址群	1998	半田市教育局委員会	
松測2号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	知多古窯址群	1961	愛知県教育委員会	
清水山1号窯	A 1	12世紀中葉	知多窯	清水山古窯址群	1980	常滑市教育局委員会	
高坂4号窯	A 1 + B 2	13世紀前葉	知多窯	高坂古窯址群	1981	常滑市教育局委員会	
松測14号窯	A 1 + B 2	不明	知多窯	松測古窯址群	1981	常滑市教育局委員会	
出地田1号窯	A 1 + B 2	12世紀中葉	知多窯	出地田古窯址群発掘調査報告書	1983	常滑市教育局委員会	
出地田2号窯	A 1 + B 2	12世紀中葉	知多窯	出地田古窯址群発掘調査報告書	1983	常滑市教育局委員会	
出地田3号窯	B 2	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	出地田古窯址群発掘調査報告書	1983	常滑市教育局委員会	
四池1区	A 1	12世紀中葉	知多窯	四池松測古窯址群発掘調査報告書	1993	常滑市教育局委員会	
金色東2号窯	A 1	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	金色東古窯址群	1979	常滑市教育局委員会	
芝山2号窯	A 1	12世紀中葉	知多窯	柴山古窯址群	1974	常滑市教育局委員会	

名称	改修法	年代	古窯群	文献	刊行年度	刊行機関	備考
市右原3号窯	A1+B2	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	知多古窯址群	1961	愛知県教育委員会	
長草立根2号窯	A1	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	長草立根古窯址群範囲内確認調査報告書	1991	大府市教育委員会	
下別曾1号窯	A1	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	下別曾古窯址群	1987	武豊町教育委員会	
下別曾5号窯	B2	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	下別曾古窯址群	1987	武豊町教育委員会	
巽ヶ丘1号窯	A1	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	巽ヶ丘古窯址	1960	知多町八幡公民館	
松測2号窯	A1	12世紀中葉	知多窯	知多古窯址群	1961	愛知県教育委員会	
松測3区	A1	12世紀中葉	知多窯	四池湖古窯址群	1993	常滑市教育委員会	
亀塚池10号窯	A1	13世紀後葉	知多窯	亀塚池古窯址群	1993	常滑市教育委員会	
深谷10号窯	B2	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	深谷古窯址群	1989	半田市教育委員会	溝は燃焼室のみ
三郎谷1号窯	B2	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	三郎谷1号窯	1981	常滑市教育委員会	
鍵場・御林D1号窯	A1+B2	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	鍵場御林古窯址群	1985	常滑市教育委員会	
鍵場・御林D2号窯	B2	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	鍵場御林古窯址群	1985	常滑市教育委員会	
鍵場・御林E-1号窯	A1	12世紀中葉	知多窯	鍵場・御林古窯址群	1985	常滑市教育委員会	
小森A区2号窯	B2	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	小森古窯址群	1990	常滑市教育委員会	
亀塚池2号窯	B2	13世紀中葉～14世紀前葉	知多窯	亀塚古窯址群発掘調査報告書	1993	常滑市教育委員会	
亀塚池8号窯	B2	13世紀後葉	知多窯	亀塚古窯址群発掘調査報告書	1993	常滑市教育委員会	
旭大池1号窯	B1	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	旭大池古窯址	1970	東海古文化研究所	
刀池12号窯	B1	12世紀後葉～13世紀初頭	知多窯	刀池古窯址群	1995	愛知県埋蔵文化財センター	
陶ヶ峰2号窯	B1	13世紀中葉	知多窯	知多古窯址群	1960	愛知県教育委員会	
親田5号窯	B1	13世紀前葉	知多窯	親田古窯址群	1996	阿久比町教育委員会	
小白根C2号窯	B1	13世紀前葉～13世紀中葉	知多窯	埋蔵文化財情報11	1997	愛知県教育委員会	
上親田窯	B1	13世紀前葉～13世紀中葉	知多窯	埋蔵文化財情報12	1997	愛知県教育委員会	
大原2号窯	A1	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	東浦町誌	1968	東浦町企画課	
大井釜山1号窯	B2	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	大井釜山古窯跡群	1987	南知多町教育委員会	溝は燃焼室のみ
大井釜山3号窯	B2	12世紀中葉～13世紀初頭	知多窯	大井釜山古窯跡群	1987	南知多町教育委員会	溝は燃焼室のみ
石浜2号窯	B1	12世紀中葉	知多窯	石浜古窯址群発掘調査報告書(1)	1980	東浦町教育委員会	燃焼室中心
大針2号窯	A1	13世紀初頭	美濃窯	一般国道248号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1987	多治見市教育委員会	
大針埴井戸1号窯	A1	12世紀後葉	美濃窯	美濃窯の焼物	1993	多治見市教育委員会	報告書未刊行
北丘9号窯	A1	12世紀後葉	美濃窯	北丘古墳群・北丘古窯跡群発掘調査報告書	1989	多治見市教育委員会	
大森奥山2号窯	A1	13世紀初頭	美濃窯	大森奥山古窯跡群	1985	可児市教育委員会	
下平田川C2号窯	B1か	13世紀後葉～14世紀前葉	美濃窯	下平田川C窯跡1	1994	瀬戸市埋蔵文化財センター	ただし石列として確認
小名田西山1号窯	A2	13世紀中葉	美濃窯	小名田西山1号窯発掘調査報告書	1986	多治見市教育委員会	
北小大上3号窯	A2	13世紀初頭	美濃窯	北小大上3号窯発掘調査報告書	1991	多治見市教育委員会	
大蔵迫間洞1号窯	B1	12世紀後葉	美濃窯	大蔵迫間洞古窯跡群発掘調査報告書	1989	多治見市教育委員会	
大蔵迫間洞4号窯	B1	12世紀中葉	美濃窯	大蔵迫間洞古窯跡群発掘調査報告書	1989	多治見市教育委員会	
明和29号窯	A2	12世紀後葉	美濃窯	明和古窯跡群発掘調査報告書	1990	多治見市教育委員会	
明和15号窯	A2	13世紀中葉	美濃窯	明和古窯跡群発掘調査報告書	1990	多治見市教育委員会	
明和36号窯	A2	13世紀中葉	美濃窯	明和36号窯発掘調査報告書	1993	多治見市教育委員会	
北小水萱原2号窯	A2	13世紀初頭	美濃窯	北小水萱原2号窯発掘調査報告書	1991	多治見市教育委員会	
北小水萱原3号窯	A2	13世紀初葉	美濃窯	北小水萱原3号窯発掘調査報告書	1991	多治見市教育委員会	
北小水大上2号窯	A2	13世紀前葉	美濃窯	北小水大上2号窯発掘調査報告書	1991	多治見市教育委員会	
北小水大上3号窯	A2	13世紀前葉	美濃窯	北小水大上3号窯発掘調査報告書	1991	多治見市教育委員会	
北小水大上4号窯	A2	13世紀前葉	美濃窯	北小水大上4号窯発掘調査報告書	1991	多治見市教育委員会	木材も確認
北小水大上9号窯	A2	13世紀初頭	美濃窯	北小水大上9号窯発掘調査報告書	1991	多治見市教育委員会	
北小水大上11号窯	A2	13世紀後葉～14世紀前葉	美濃窯	北小水大上11号窯発掘調査報告書	1991	多治見市教育委員会	
惣作16号窯	A1	12世紀後葉～13世紀初頭	瀬美窯	惣作古窯跡群	1976	田原町教育委員会	焼台固定用と報告
竜ヶ原2号窯	A1	12世紀後葉～13世紀初頭	瀬美窯	竜ヶ原古窯跡群	1976	赤羽町教育委員会	焼台固定用と報告
竜ヶ原5号窯	A1	12世紀後葉～13世紀初頭	瀬美窯	竜ヶ原古窯跡群	1976	赤羽町教育委員会	焼台固定用と報告

第1表②

っている。生産内容は前段階のような特殊器種焼成窯が基本的に存在せず、小器種生産がもっぱらとなる。また、各生産地もこの段階以後ではそれぞれの特色を持つものとなるようである。ここでまず注目したいのは東山窯と渥美窯の消滅である。東山窯と渥美窯は、12世紀～13世紀初頭頃に特殊器種の生産などで、灰釉系陶器生産の代表的位置を占めている。そしてこうした生産地が、ほぼ突然に消滅する背景には前段階にみられた枠組みが崩壊したことを予想することができる。ところでこの時期の変化は、東山窯や渥美窯にだけみられるものではない。具体的には、美濃窯での緻密な胎土を使用した器壁の薄い製品の登場、尾北窯の消滅などがある。また、湖西窯の成立も注目できる。ここでは、やや特異な構造の窯体で生産が継続する。また、猿投窯は爆発的ともいえる窯数の増大をへて、13世紀末にはほぼ突然消滅する。なお、やや年代がさがるが、知多窯で大型品専業窯が成立することなどもこれに関連して捉えられるであろう。また、瀬戸窯での施釉陶器生産の成立もほぼ同時期の現象である。

6

以上、灰釉系陶器焼成窯に時々みられる床下施設に着眼し、この技術が伝播する背景に灰釉系陶器生産を掌握する存在を想定した。そして、各生産地で僅かに知られる特殊器種をその存在と直接結びつく製品と考えた。

掌握者の実像とその影響力の規模については不明な点が多い。おそらくこれは灰釉陶器生産を灰釉系陶器生産として再編成したものと同一存在で、ほぼ12世紀代～13世紀初頭に限って掌握力を発揮できたものと考えられる。そして、床下施設を付設する技術は、その末期に掌握者によって各生産地に伝播したのであろう。しかし、こうした掌握力は13世紀に入るとやがて失われる。特殊器

種の生産が基本的に停止していること、各生産地の生産内容に特色が生じることなどがその根拠としてあげられるであろう。そしてそれは灰釉系陶器の各生産地が分業または競合する割拠の時代へと移行したことを物語っているのではなかろうか。

文末で恐縮ではありますが、この小稿を成すにあたり、日頃より御世話いただいている天野暢房先生をはじめ、荒木 実・内田智久・森 勇一・三宅唯美・松田 訓・阿部佐保子（順不同、敬称略）の各氏には多大な御教示、御助言を頂きました。記して謝意を表します。（1998.1.13）

注

- (1) 筆者は本来灰釉陶器と山茶碗とを同一概念で理解し、「灰釉系陶器」と呼称する立場（池本 1990a・1990b）であったが、煩雑になるなどの理由からこの概念は一旦凍結する。なお、本稿の用いる「灰釉系陶器」の概念は、瓷器系陶器第Ⅱ、Ⅲ類（植崎 1979）全般を指すものとなっている。
- (2) ただし、床下施設全てを操業期間中に考える必要はない。実例は確認してはいないが、築窯時にもこれは有効と考えている。築窯はおそらく重労働であるほか、天井崩落の危険性も伴う。従って、こうした築窯中の窯体が、偶発的で非継続的な湧水だけを理由として放棄されるのは理解しにくい。窯体の掘削段階に生じた湧水は、床下施設を付加すれば制御できるはずある。従って、最近時々報告される、掘削途中で放棄された窯体は、作業中の天井崩壊などを主な原因として考えたい。なお、余談となるが、窯体が湧水期以外の活動を求められたとき

にも、窯体の防湿はより一層の課題となるであろう。

- (3) こうした作業の存在は、当然床面の断ち割り調査が実施された事例でなければ確認できない。また、今回は作業Aに床面掘削後に土を充填する段階で炭化物を敷かない事例は含んではいない。このため、報告書に床下の充填土についての記述が省略されているものについても掲載していない。これらの点を考慮するのであれば、これ以外にも多数の事例が存在していたことが予想できる。なお、床面掘削後に土を充填する段階で炭化物を敷かない事例も作業Aの範疇に含むのであれば（作業A 3類）、この傾向はさらに増大するはずである。

- (4) ここで言う小皿は深目の体部を有する小碗から高台を取り去った無高台の器種をさす。

第1表補足説明

本表の用いる年代観は、藤澤編年（藤澤他 1990）を基軸とし、知多窯については、赤羽・中野編年を対応させている。美濃窯については、やはり（藤澤他 1990）に示された並行関係を使用している。なお、細部に存在するズレは、（藤澤他 1990）を基本として横に切りそろえている。このため若干の問題点が存在するが、時期を大づかみに理解することで足りる本稿の主旨には大きな障害とはならないと考えている。

なお、遺跡Bについては報告書に従う。ただし、混乱の恐れがある事例には備考に別称を記した。

参考・引用文献

- 池本正明 1984 「穴田南古窯址群二次調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ 瀬戸市歴史民俗資料館
池本正明 1990a 「猿投窯の山茶碗」『マージナル』10 愛知考古学談話会
池本正明 1990b 「奥三河の灰釉系陶器」『考古学フォーラム』 愛知考古学談話会
池本正明 1997 「細口下1号窯跡」『年報』平成8年度 愛知県埋蔵文化財センター
磯部幸男 1981 『高坂古窯址群』 常滑市教育委員会
奥川弘成 1987 「遺構と遺物」『別冊古窯址群』 武豊町教育委員会
小野田勝一他 1981 『竜ヶ原古窯址群』 赤羽根町教育委員会
小島一夫他 1976 『徳重西部土地地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告』 名古屋市教育委員会
柴垣勇夫 1982 「尾張における平安末期の瓦生産」『愛知県陶磁資料館研究紀要』1
柴垣勇夫 1989 「十二世紀における中世窯の成立」『東洋陶磁』17
杉崎 彰他 1980 『清水山古窯址群』 常滑市教育委員会
中野晴久 1994 「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」』 日本福祉大学知多半島総合研究所
中野晴久他 1985 『鍵場・御林古窯址群』 常滑市教育委員会
中村五郎 1996 「信仰・宗教者の陶器の生産と流通」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅶ
榑崎彰一 1979 「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集』3
新美紀元 1996 「床面下施設について」『親田古窯址群』 阿久比町教育委員会
余合昭彦 1995 「中世窯における床面下の施設」『刀池古窯跡群』 愛知県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐他 1990 『尾呂』 瀬戸市教育委員会
若尾正成他 1989 『大薮迫間洞古跡群発掘調査報告書』 多治見市教育委員会

第3・4図解説

ここでは床下施設の実例を、第3・4図に示す特徴的な7例について説明を加える。

清水山1号窯

清水山1号窯は、常滑市金山字西石田に所在する。12世紀中葉に属する分焰柱を有する窖窯である。学術調査で1974年に作業が実施されている。調査主体は常滑市教育委員会で、報告書は1980年に同機関から刊行している（杉崎他 1980）。

検出できた窯体は、燃烧室から焼成室下方が残存し、残存長は7.5m、最大幅2.6mをはかる。床下施設は作業A1類である。分布範囲は、分焰柱より焼成室側に2.4m地点から上方となる。使用部材は灰釉系陶器の椀類と壺、甕類で、中央部分に前者、左上方に後者が敷き詰められる傾向がある。

NKI-1C号窯

NKI-1C号窯は、名古屋市緑区鳴海町に所在する。13世紀中葉に属する分焰柱を有する窖窯である。発掘調査は土地区画整理を原因として、昭和49年に実施されている。調査主体は名古屋市教育委員会で、報告書は1976年に同機関から刊行している（小島他 1976）。

検出できた窯体は、燃烧室から焼成室下方が残存し、残存長は5.9m、最大幅2.7mをはかる。床下施設は作業A1類である。分布範囲は、分焰柱付近より上方となるが、分焰孔と焼成室左方は分布状況が希薄となる。使用部材は灰釉系陶器の椀類である。

竜ヶ原5号窯

竜ヶ原5号窯は、渥美郡赤羽根町に所在する。12世紀後葉～13世紀初頭に属する障壁を有する窖

窯である。発掘調査は農地開発を原因として、1980年に実施されている。調査主体は赤羽根町教育委員会で、報告書は1981年に同機関から刊行している（小野田他 1981）。

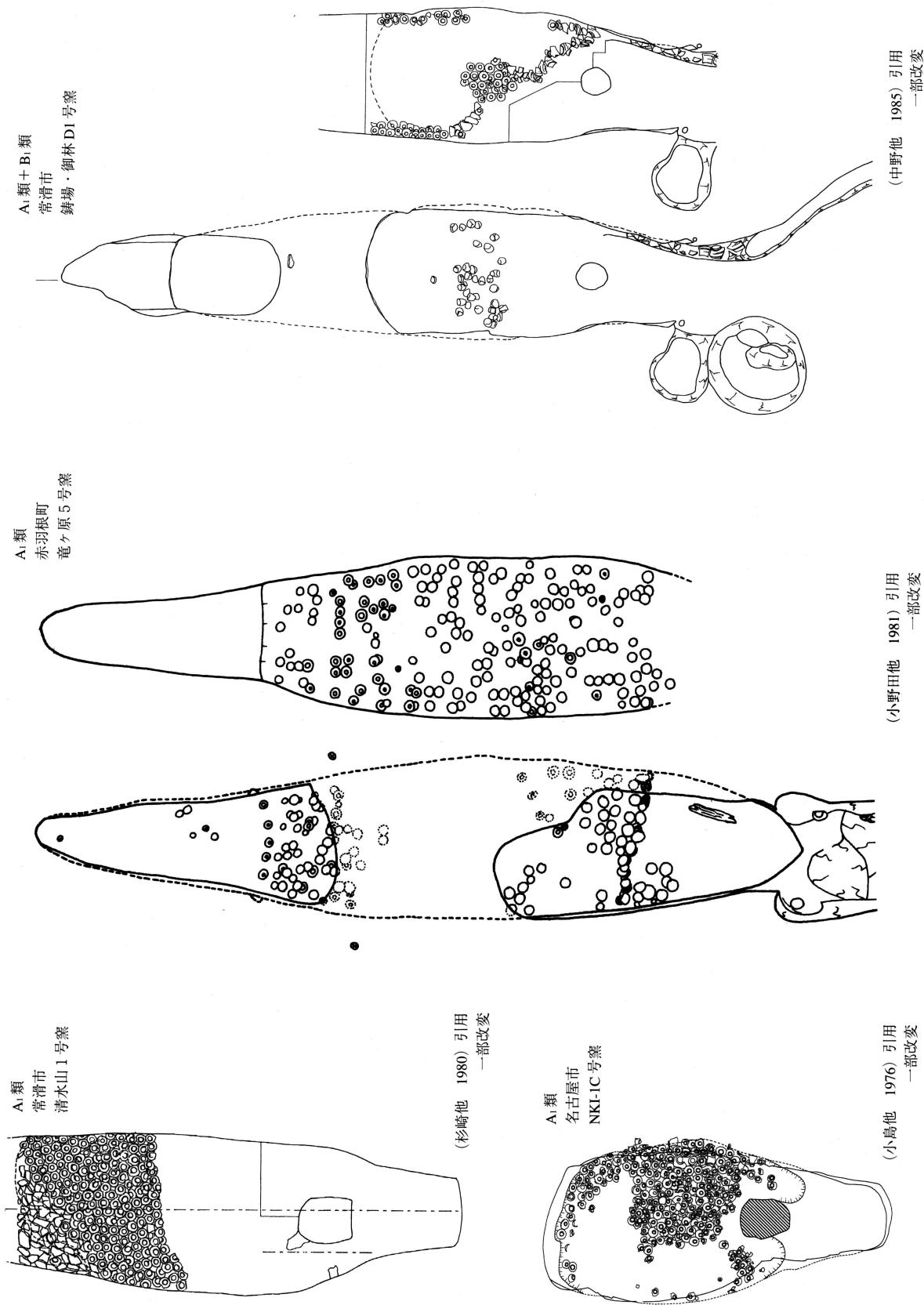
検出できた窯体は、床面がほぼ完存し、存長は11.4m、最大幅2.0mをはかる。

報告書には床下施設の存在は記述されていないが、事実報告中に所見として、焼成室に焼成不良の灰釉系陶器椀が伏せられていること（右図）、この上層に馬爪焼台の列（左図）が確認できたという記述がある。報告書は焼成不良の椀を焼台としているが、状況から判断して作業A1類の床下施設であろう。分布範囲は焼成室のほぼ全域。使用部材は灰釉系陶器椀、馬爪焼台である。分布状況は粗となる。

鐘場・御林D1号窯

鐘場・御林D1号窯は、常滑市久米字鐘場、同御林に所在する。12世紀後葉～13世紀初頭に属する分焰柱を有する窖窯である。発掘調査は工業団地造成を原因として、1983年に実施されている。調査主体は常滑市教育委員会で、報告書は1985年に同機関から刊行している（中野 1985）。

検出できた窯体は、床面がほぼ残存し、残存長は11.4m、最大幅2.3mをはかる。床下施設は作業A1類と作業B1類である（右図）。具体的内容は、前者が焼成室下部に各壁面に沿って列状に伸び、左壁側は右壁の排水溝起点まで窯体を斜めに渡る構造。中央部分は空白となる。後者は、排水溝を右壁側直下に設置するもので、起点を焼成室下端、終点は窯外に至る。使用部材は灰釉系陶器の椀と鉢で、前者は作業A1類に後者は作業B1類に多く使用されている。



第3図 床下施設施工案1 (1:80)

高坂4号窯

高坂4号窯は、常滑市宇高坂に所在する。13世紀前葉に属する分焰柱を有する窖窯である。発掘調査は墓地公園造成を原因として、1979年～1980年に実施されている。調査主体は常滑市教育委員会で、報告書は1981年に同機関から刊行している（磯部他 1981）。検出できた窯体は、燃烧室から烧成室下方が残存し、残存長は8.0m、最大幅2.3mをはかる。床下施設は作業A1類と作業B1類である。具体的内容は、前者が烧成室下方2.6mまでに全面に破片を敷く。分布状況は左壁側が右壁側に比較して密となる。後者は、排水溝を右壁側に設置するもので烧成室下端から上方に計測して約2.0m地点を起点とし、終点は窯外に至る。溝内には陶片を粗に敷き詰める。使用部材はいずれも灰釉系陶器の壺、甕類である。

大藪迫間洞1号窯

大藪迫間洞1号窯は、多治見市大藪町迫間洞に所在する。12世紀後葉に属する分焰柱を有する窖窯である。発掘調査は道路改良工事を原因として、1988年に実施されている。調査主体は多治見市教育委員会で、報告書は1989年に同機関から刊行している（若尾他 1989）。

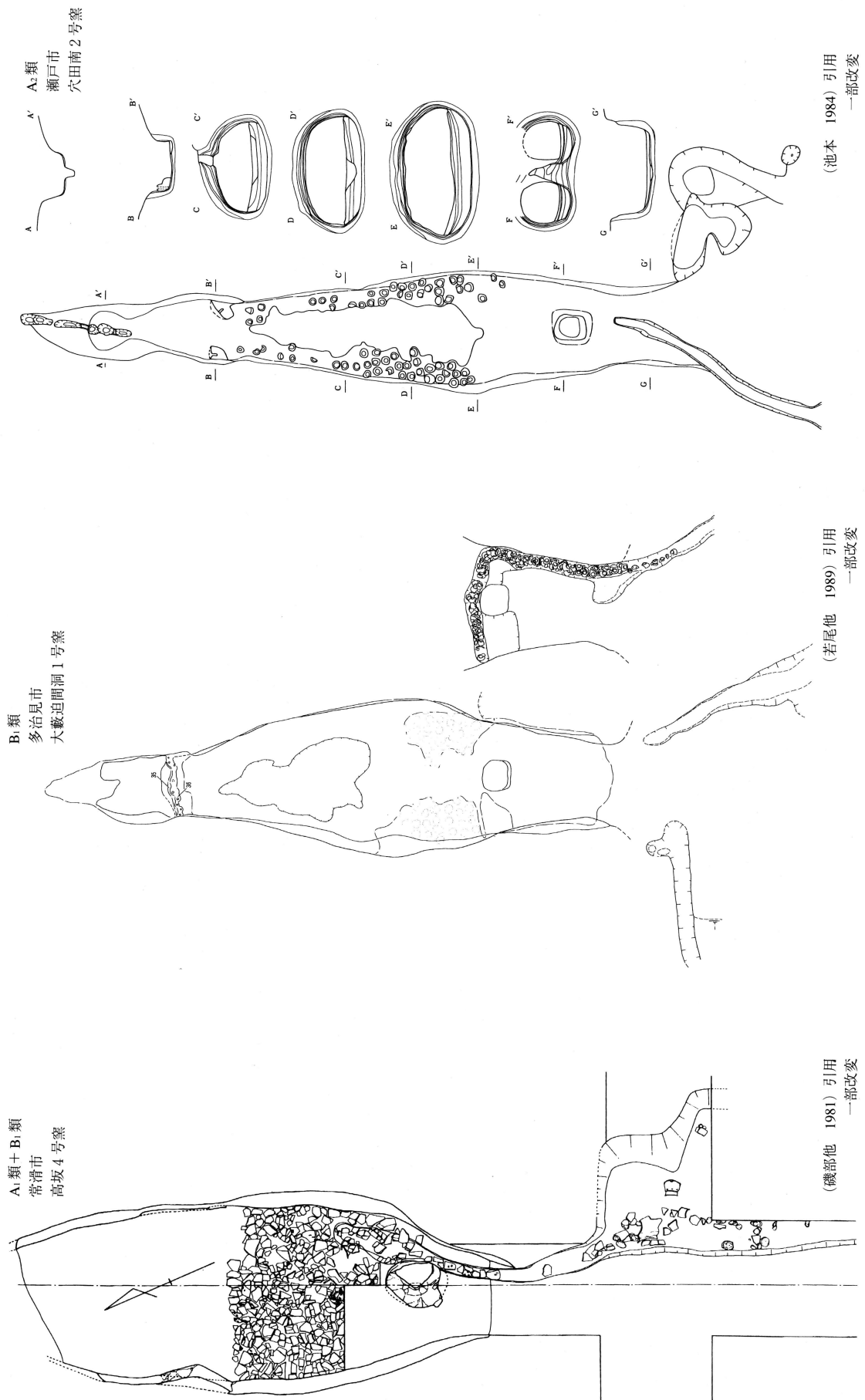
検出できた窯体は、床面がほぼ残存し、残存長は9.8m、最大幅2.7mをはかる。床下施設は作業B1類である（右図）。排水溝は起点を左壁側の烧成室下端とし、窯体を渡る形で伸び右壁直下を分焰孔から燃烧室をへて窯外に至るものである。溝内には陶片を密に敷き詰める。使用部材はいずれも灰釉系陶器の椀類である。

穴田南2号窯

穴田南2号窯は、瀬戸市上水野町に所在する。12世紀後葉～13世紀初頭に属する分焰柱を有する窖窯である。発掘調査は、土砂採取を原因として

1983年に実施されている。調査主体は瀬戸市教育委員会で、正式報告は1984年に瀬戸市歴史資料研究紀要に掲載されている（池本 1984）。

検出できた窯体は、床面がほぼ残存し、残存長は10.0m、最大幅1.9mをはかる。床下施設は作業A2類と作業B2類である。前者では床面を操業期間中に掘削したことが、C～Fまでの各横断面で観察できる。一方後者は燃烧室中央から窯外に伸びる排水溝が認められる。ただし、これは烧成室には存在しない。



第4図 床下施設施工案2 (1:80)